郷土への扉
The gateway to local history

雨乞いの宮 早鈴神社

梅雨になり、雨が降り続けて気分も落ち込む季節。しかし、雨が降らないと作物が育たず、農家にとっては死活問題につながります。

今回はそんな雨になぞらえて、「雨乞いの宮」と呼ばれる早鈴神社を紹介します。

早鈴神社とは

隼人町小浜の埒上集落にある鎮守の森、その中にたたずむのが早鈴神社です。嘉吉4（1444）年に地元の願主、藤原忠治によって創建されたとされ、天照皇大神、瓊瓊杵尊ほか11の祭神を祭っています。小浜地区の中心的神社でもある早鈴神社は、戦国武将・島津義久の逸話を由来として、別名「雨乞いの宮」と呼ばれています。

「雨乞いの宮」の由来

江戸時代の初め慶長9（1604）年の初夏、小浜では雨が全く降らず日照りが続き、地域の人たちが困り果てていました。当時、富隈城に居を構えていた島津義久は小浜を訪れた際、その様子を見て雨乞いの和歌を詠みました。

五月雨の 雲かさなりて 日比ふれ
なべて早苗の うるほばかりに

山めぐる 雲のさそはば 雨おちて
大御田小田の 早苗うるほせ

詠んだ和歌を早鈴神社に納めたところ、その日のうちに大雨となって干ばつを免れたといわれています。その後も日照りが続いた際に、この和歌を神社に奉じて雨乞いをするとすぐに雨が降ったとされています。

早鈴神社から少し離れた場所にある「小浜邑早鈴宮祈雨之銘」と刻まれた石碑は、この出来事が忘れ去られず後世にも伝わるようにと、200年後の文化6（1809）年に地域の人たちが建てたもので、「雨乞いの碑」と呼ばれています。

新たに見つかった文化財

昨年、地域の人から連絡を受けて市が調査したところ、早鈴神社の建物の中に、古い本殿があることが分かりました。

本殿は、元禄3（1690）年に建てられたものだと考えられます。※1木造三間社流造りの屋根が※2柿葺きで、棟に※3鬼板を置くという珍しい造りになっています。元禄期に造られた建物がそのまま残っている例は県内にほとんどなく、1月に市は有形文化財（建造物）に指定しました。覆屋に囲まれていて、普段は見ることはできませんが、周囲には江戸時代以前のものと思われる石造物も多く残っています。

歴史の跡が今も確認できるのは、地域の人に大切にされてきた証拠です。今後も大切に守り続けてほしいものです。

今年は義久の弟である島津義弘没後400年に当たりますが、あらためて本市と縁が深い義久にも目を向けてみるのはいかがでしょうか。

（文責＝小）

早鈴神社

雨乞いの碑

※1神社建築の様式で最も一般的な「流造」のうち、正面の柱が4本あるもの。
※2屋根の板葺きの一種。スギやサワラの手割り板を重ね、竹釘を使って葺き上げる。
※3屋根の頂部に作る棟の両端に鬼瓦の代わりに取り付ける板。